

<研修概要>

2022年4月1日から2023年3月31日まで、筑波大学体育系の菊幸一教授に受け入れ先を提供していただき、「スポーツにおける「ダイバーシティ」の批判的検討」というテーマで研究をおこなった。

近年、日本社会で「ダイバーシティ（多様性）」の尊重や「女性活躍」推進がうたわれるようになった。スポーツも例外ではないが、それらに向けた具体的な取り組みや諸現象からは、シスジェンダー異性愛男性文化として成立・発展してきたスポーツならではともいえる問題がみられる。このことに着目し、本研修では、女性スポーツやLGBTQを対象とする公的施策および民間との連携事業にかかわる事例を収集し、スポーツ界で周縁化されてきた「LGBTQ」と「女性」を包摂しようとする動きが新たな排除を生み出す構造について、社会学的視点から考察した。

「多様性」、「女性活躍」志向の高まりはともに東京2020オリンピック・パラリンピックを背景としているが、前者はおもに自治体、企業、メディアにおける対LGBTQ+施策への関心の高まりという形であらわれた。そこでまず、日本の性的マイノリティ女性や国内外の性的マイノリティ女性アスリートの位置づけに関する先行研究を検討し、当事者へのインタビュー調査およびメディア調査の結果について社会学的視点から分析した。なお、調査や資料収集自体は前年度から継続しており、その成果の一部は2022年9月に刊行された共著書『スポーツとLGBTQ+』（晃洋書房）を通じて発信している。そのうえで、本研修ではさらにデータを蓄積するとともに、事例の分析を社会学的研究として形にするべく理論面での充実をはかり、菊教授のゼミや立命館大学岡田桂教授らとの研究会で議論を重ねた。研修を通じて明らかになったのは以下2点である。スポーツにおける「ダイバーシティ」事例は、(1) 従来、性的マイノリティの社会運動を通じて求められてきた人権尊重の側面ではなく経済効果の側面が重視されているという、現在の日本社会におけるLGBTQブームの一端を示している。(2) したがって、日本では、性的マイノリティを「マイノリティ」たらしめる異性愛主義的な社会構造に異議を唱える当事者ではなく、東京2020にともなう「多様性尊重」にふさわしい「LGBTQアスリート」を求めた。

一方、スポーツにおける「女性活躍」現象として注目したのは、女性アスリートが直面する「女性特有の問題」への取り組み（とりわけ月経をめぐる諸問題に対する医学的な側面からのアプローチ）、そして「ママさんアスリート」をサポートする制度構築である。両者はともに女性アスリートのリプロダクティブ・ヘルス・ライツにかかわる。とりわけ前者については、女性アスリートが自らの「月経問題」を語り、スポーツ関係者に変化を求めるといった現象がみられた。これは日本の女性アスリートが主体的に声を上げた稀有な事例として捉えることもできる。そこで本研修では、近年の社会学やフェミニズム視点からの先行研究、とりわけ女性が「声を上げる」こと

をめぐる議論について検討し、その知見にもとづいて考察した。研修を通じて明らかになったのは以下の2点である。(1) アスリートを含むスポーツ関係者の女性が主体的に声を上げることや、新たな動きに向けて明確なはたらきかけをするという点について、フェミニズムの視点から社会的異議が見いだせる。(2) しかし一方で、「月経問題」の位置づけや対応は医科学的な観点に偏っており、「月経問題」を生み出す根本的な構造でもあるスポーツの男性中心主義のあぶり出しや、ジェンダー視点からの批判的見直しの機会を逸している。以上の成果の一部は、3月に刊行した『現代社会におけるスポーツと体育のプロモーション——スポーツ・体育・からだからの展望』（清水諭ほか編、大修館書店）で発信している。本研修におけるスポーツにおける「女性活躍」現象は、「月経問題」、「ママさんアスリート」にとどまらず他の事例においても共通する構造がみられると考えられるため、今後の研究を通じてデータを収集したうえで、さらに分析を深めていきたい。